

令和 6 年 5 月 15 日現在

機関番号：25403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00744

研究課題名(和文)日本人英語学習者の派生語知識に関する包括的研究

研究課題名(英文)A comprehensive study on derivative word knowledge of Japanese learners of English

研究代表者

森田 光宏(Morita, Mitsuhiro)

広島市立大学・国際学部・教授

研究者番号：30422166

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語学習者がどの段階で、どの程度の派生語知識を持っているのか、そして、どのように伸長するのかを明らかにすることを目的としている。派生語知識学習歴の振り返りから、中高での指導を記憶している学習者は相対的に少ないことが分かった。しかし、記憶に残っている学習者では、より派生語知識が豊富であることも分かった。また、大学生では、1年での派生語の伸長は軽微であり、中高大を通じての意識的な指導の必要性が示唆された。得られたデータより、派生語知識の概念的整理や他の技能との関わりがさらに明らかになることが期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

派生語知識は英語の語彙力の中の一つではあるが、読解や聴解との関連が深く、重要なものと考えられている。しかし、中高大の英語の授業でどの程度指導されているのかは分かっていない。本研究から、記憶に残るほどの指導がなされていないこと、記憶に残っていると知識が確かに備わっていることが分かった。中高大を通じた明示的で意識的な指導が求められることが分かった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify at which stage English learners possess derivative word knowledge, to what extent they have it, and how it develops. A retrospective analysis of their learning history revealed that relatively few learners remembered receiving instruction on derivative word knowledge in middle and high school. However, those who did recall such instruction were found to have more extensive derivative word knowledge. Furthermore, among university students, the growth of derivative word knowledge over a year was minimal, suggesting the need for conscious instruction through middle school, high school, and university. The data obtained is expected to shed further light on the conceptual organization of derivative word knowledge and its relationship with other skills.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 語彙 派生語

1. 研究開始当初の背景

大量の語彙を学び、整理するためには派生接辞の知識を活用することが効果的であると考えられる。しかし、実際に英語学習者がどの段階でどの程度の派生語知識を持っているかについては、十分な研究が行われていない。英語を第一言語とする話者に対する研究では、読解力を中心に派生接辞知識の重要性が認識され、多くの研究が蓄積されている。一方で、日本人をはじめとする外国語として英語を学ぶ学習者を対象とした研究では、様々な測定具(テスト)が単発的に使用され、その結果を統合的に扱うことが難しい状況である。

そこで本研究では、まず測定具の検討を行い、大学1年生を対象に派生接辞知識の測定を実施する。さらに、その知識がどのような学習や指導の成果として現れているのかをアンケートを用いて調査する。そして、派生接辞知識がどのように伸長するのかについても検討する。これにより、日本人大学生の持つ派生接辞知識について、これまで以上に包括的な研究が可能となると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、派生接辞の知識が日本人英語学習者にどの程度備わっており、どのように伸長していくかについて包括的な研究を行うことである。それにより、どの程度の習熟度の学習者に対して、どのような知識に焦点を当てて指導すべきかについての基盤となる知見を得ることが可能である。

具体的な研究課題としては、以下の4点を明らかにすることである。

派生接辞測定として用いられてきた測定が何を測っているのか

大学1年生時点で、どのような派生接辞知識をどの程度持っているか

大学入学以前にどのような派生接辞指導・学習があり、それらが派生接辞知識と関連しているか
大学入学以降で派生接辞知識が伸長するか

3. 研究の方法

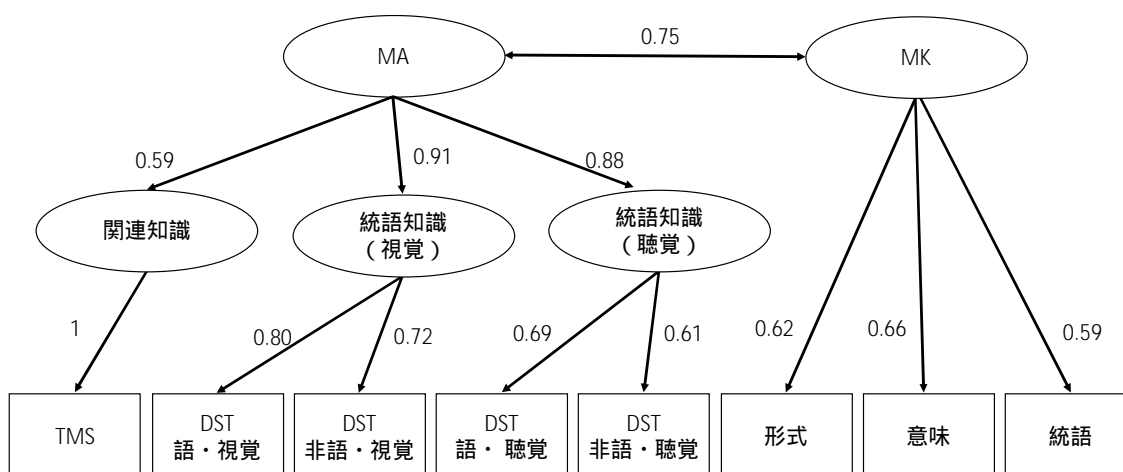
1) 研究課題を明らかにするために、大学1年生(516名)に対して3つの派生接辞に関わるテストを実施した。英語を第一言語とする子どもたちに行われることの多いテストとして、Carlisle (2000)よりTest of Morphological Structure (TMS)、そして、Singletonら(2000)よりDerivational Suffix Test (DST: 視覚提示と聴覚提示の2種類)を用いた。第二言語研究で近年用いられるようになったWord Part Levels Testのコンピュータ適応型であるCAT-WPLT (Mizumoto et al 2019; 形式、意味、統語)である。これらはすべてオンラインで実施した

2) から 4) の研究課題に対して、大学1年生630名を対象にオンライン上でのアンケートとCAT-WPLTを行った。4月と翌年の1月に実施し、研究課題3)と4)に対応したアンケート項目を用いた。

4. 研究成果

1) 従来、明確な区分や定義がなされずに使用されてきた派生接辞測定テストが派生接辞の異なる知識側面を測定していることが明らかになり、概念的な整理をすることができた。図1にあるように、英語を第一言語とする子どもたちに用いられてきたMorphological Awareness (MA)と、第二言語習得研究で用いられるMorphological Knowledge (MK)は異なる潜在変数であるとするモデルが最もデータへの当てはまりがよかった。

図1. 派生接辞知識の概念的区分(確証的因子分析による検討)



2) 1)で用いられたテストの成績から、大学1年生の派生語知識の状態を検討した。表1は、各テストの記述統計である。

表1. 各テストの記述統計 (N = 516)

MAテスト	k	M (SD)	MKテスト	k	M (SD)
TMS	28	15.45 (5.57)	形式	20	-0.35 (0.73)
語 : 視覚提示	10	8.01 (1.79)	CAT-WPLT 意味	15	-0.74 (0.72)
DST 非語 : 視覚提示	10	6.88 (2.07)	統語	10	-0.23 (0.80)
語 : 音声提示	10	5.99 (1.89)			
非語 : 音声提示	10	4.37 (1.94)			

注.TMS と DST は項目数(k)を満点としているが、CAT-WPLT の得点は能力値 であり 1 から -1 を取る

この結果から、MA テストで測定されるような文に埋め込まれた形式での派生接辞の測定では、比較的高い数値を示した。特に、実際の語が視覚提示された TMS や DST (語 : 視覚提示) では高い数値を示している。しかし、音声提示の場合には得点が低く、文字情報が優位であることが分かる。また、個別の派生接辞を取り出して個別に測定する MK テストでは、派生接辞を同定するための知識 (形式) や意味に関わる知識が、品詞に関わる知識 (統語) よりも低いことが分かった。この結果は、日本人大学生が英語の読解や文法に関わる知識は一定程度持っていることを示す一方で、語彙そのものの知識については偏りがあることを示している

3) 大学1年生の派生接辞知識に影響を与える要因として、大学入学以前の学習や指導を受けた経験についての結果から、以下のことが明らかになった。

- 半数程度 (46%) は大学入学以前で、派生接辞の指導を受けたことがない。
- 半数程度 (54%) は中学や高校で、派生接辞の指導を受けている。
- 高校で指導を受けることが多い
- 特に、高1で指導を初めて受けることが多い
- しかし、1学年だけ (場合によっては1回だけ) の指導であることが多い
- 教員が教科書外で派生接辞の指導をしている
- 具体的取り上げられた派生接辞の種類は限定的

これらのことから、大学1年生の記憶にある派生接辞の指導はかなり限定的であることが明らかになった。

4) 大学入学直後の4月と10ヶ月ほど英語指導を受けた翌年の1月でCAT-WPLTを実施した結果は表2の通りである。対応のあるt検定の結果、意味と統語に有意差が見られ、意味の知識が減退し、統語の知識が伸長したことが分かった。授業では、文法項目と関連付けて派生接辞知識を

活用することはあったが、その他の派生接辞指導は教科書には出てこず、教員もほとんど行わなかったことがアンケートから示されており、読解・文法中心の指導であったことがわかる。つまり、中高段階と変わらず、大学でも派生接辞指導はほとんどなく、大学1年の授業を通しては、統語以外の派生接辞知識はほとんど伸長しないことが分かる。

表2. 2回のCAT-WPLTの結果 (N = 500)

	4月平均 (SD)	1月平均 (SD)	差分
形式	5.31 (1.30)	5.26 (1.66)	-0.05
意味	5.52 (1.64)	5.34 (1.72)	-0.18
統語	5.85 (2.13)	6.02 (1.89)	0.17

注. 表注の数値は、CAT-WPLTの得点は能力値を線形変換し0から10範囲で示したものである

1)から4)の研究課題に対する調査から分かったことは、大学1年生の持つ派生接辞知識は限定的であり、その要因としては、中高大を通して記憶に残るほどの指導を受けていないことが考えられる。より専門性が高い英文を読むようになれば、必然的に派生接辞知識が求められるような低頻度で、文字数が長く、そして、派生接辞が複数付与されている語彙も増えてくる。そのような語彙を理解し、自分で使えるようになるためにも、効果的な派生接辞指導が望まれる。

参考文献

- Carlisle, J. F. (2000). Awareness of the structure and meaning of morphologically complex words: Impact on reading. *Reading and Writing: An Interdisciplinary Journal*, 12, 169–190. <https://doi.org/10.1023/A:1008131926604>
- Singson, M., Mahony, D., & Mann, V. (2000). The relation between reading ability and morphological skills: Evidence from derivational suffixes. *Reading and Writing*, 12, 219–252.
- Mizumoto, A., Sasao, Y., & Webb, S. A. (2019). Developing and evaluating a computerized adaptive testing version of the Word Part Levels Test. *Language Testing*, 36(1), 101–123. <https://doi.org/10.1177/0265532217725776>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Morita, M., Uchida, S. & Takahashi, Y.	4. 巻 32
2. 論文標題 The Frequency of Affixes and Affixed Words in Japanese Senior High School Textbooks: A Corpus Study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Annual Review of English Language Education in Japan	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森田光宏・阪上辰也・鬼田崇作・高橋有加
2. 発表標題 派生形態論的知識の複数側面間の関連性
3. 学会等名 外国語教育メディア学会2023年度全国研究大会（LET62）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森田光宏・鬼田崇作・阪上辰也・高橋有加
2. 発表標題 日本人大学生の英語派生接辞学習歴 振り返りデータによる検討
3. 学会等名 全国英語教育学会第48回香川研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鬼田 崇作 (Kida Shusaku) (00611807)	同志社大学・文学部・准教授 (34310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	阪上 辰也 (Sakaue Tatsuya) (60512621)	広島修道大学・人文学部・准教授 (35404)	
研究分担者	高橋 有加 (Takahashi Yuka) (60825222)	東京家政大学・グローバル教育センター・期限付准教授 (32647)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関